



3/3 入試直前ゼミ最終日



3/5 入試が終わって自己採点。入試問題は易しかったので全員が過去最高点！



『高校入試終わる。全員合格！』  
3月18日、公立高校の合格発表があった。今年は釧路高専3名（6名合格）、江南高校1名、北陽高校5名、明輝高校2名、工業高校4名、札幌平岡高校1名の16名全員が合格だった。  
合格が決まっても気を抜かず、すぐに先取り学習の高校スタートダッシュの授業。入学後のテストで良い点を取れるように頑張っていた。  
高校入試はゴールではなく、新たな出発点なので3年後の進路や目標を早い段階で決めることが必要だ。高校3年間を楽しく過ごすとその後は悲惨なことになるのが現実だ。  
部活やアルバイトに引きずられることがないように、また安易な方向を選択しないようにすることだ。



3/18 北陽高校合格者発表の瞬間



北陽高校に合格した河村・姉崎さんと友人



気を抜かずに高校スタートダッシュ！



3/25～31 新中学1年生の無料春期講座に17名が参加してくれました。タイピングや漢字検定の練習、そして中学校の



『中学生、悩み相談「母に」増加』  
NHK放送文化研究所が2012年夏に中学生約1100人に実施した意識調査で、悩み事の相談相手として「友人」を挙げる生徒が減り、「母親」が増える傾向が続いていることが分かった。母親に相談すると答えた中学生は全体の38%、高校生は25%を占め、10年前の前回調査に比べて8～13ポイント上昇した。友人は7～10ポイント低下した。  
母親との関係についても「うまくいっている」と答えた中学生は95.7%、高校生で97.4%に上った。同研究所は「少子化で母子関係がより緊密になる一方、他人とは衝突を避けようとする子が増えている。気を使う友達よりも、母親の方が相談しやすい存在になっているようだ」と分析している。  
お父さんはどうなっているのでしょうか？



数学、英語の先取り学習に一生懸命に取り組んでいました。



中2は3時間、中3は4時間の春期



慶應義塾、青山学院に合格した新田君と通り終わって12月の中旬頃からセンター試験対策に本腰を入れてやるようになり、一ヶ月間センター対策の勉強だけをみっちりやったのですが、今年のセンター試験では思うよう



國學院大學の織田君が久々に。浪人してからも目標は北大で、夏までは基礎、それ以降は応用問題に取り組み、模試ではA判定を取れるようになりました。模試もひ



新田、大坪君とプリンスホテルで昼食格でした。それから家の事情で東京に引っ越すことになり、東京にある駿台予備校で浪人しました。この予備校では、とにかく周りの生徒の意識やレベルが高く勉強する

『慶應大学に合格した新田君からのメッセージ』  
この塾を卒業してから4年、僕は1年間の浪人を経て大学生になろうとしています。  
ステップゼミナールには小学校3年生から7年間通い、江南高校に進学しました。3年間は塾に行かずにテニス部に所属していましたが、何とかなったのは塾に通った7年間の貯金だったと思います。僕は高校1年生の初めから北海道大学を志望していました。  
一つ自慢できるのは高校に入ってからすぐ北大の本（過去問）を買ったことですが、ひとつも出る問題はありませんでした。  
もともと数学は得意だったので授業にはついていけなかったが、英語は最後まで伸び悩み、現役での受験でも、結局英語が足を引っ張り、何校か受

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	
		☆通常授業（5月2日に振り替え）							休塾							休塾							通常授業開始	休塾	休塾	休塾	春期講座最終日	中三道コン	中一、二道コン	春期講座

携帯電話の持込は禁止。連絡は塾の電話を使用して下さい。

## 4月の予定

に行かず、現役の時よりも点数が下がるという結果で、北大はE判定。それでも二次試験にはすごく自信があったので迷わず願書を出しました。結局今年も北大には合格できませんでしたが、慶應義塾大学と青山学院大学に合格したので慶應義塾大学に進学することにしました。昔から行きたかった北海道大学に合格できなかったのは悔しいのですが、この一年間は本気で勉強したので、この結果には満足しています。  
高校受験も大学受験でも本番でうまくいかないことがあります。例え第一志望に届かなくても、その結果に満足できるように全力で勉強することが大事だと思います。  
塾生の皆さんも高い目標を設定し、塾の指導に従って本気で取り組めば、必ず良い結果に繋がると思っています。頑張ってください。  
（新田智徳）

## 『トランペット いつか患者さんのために』

午後2時46分。父と弟が暮らす岩手県陸前高田市に戻った佐々木瑠璃さん(19)はそっと手を合わせ、目を閉じ、うつむいた。

9歳のころ、祖母母にトランペットをねだったこと。欠かさず演奏会に駆けつけてくれた母が「上手ね」と笑うたび、うれしくなったこと。何度も思い出した光景が、また目に浮かんだ。

青い空に、小雪が舞っている。「2年前と同じだ」。あの日、母の宜子(のりこ)さん(当時43)と祖母、叔母、いとこを失った。1カ月後、津波にのまれた自宅跡でトランペットを吹いた。曲はZARD(ザード)の「負けないで」。天国に「心配しないで」と伝えたかった。

幼いころは獣医師にあこがれ、やがて医療の仕事を見ようになった瑠璃さんを、母は「すてきな道ね」と応援してくれた。人の命を救いたい。昨年4月、看護師をめざして福島県立医科大学に進学した。

福島市のアパートでの一人暮らし。運転免許を取り、髪を茶色に染めた。体力をつけようと水泳部にも入った。「毎日が新鮮」。でも、いつも悲しみは背中合わせだった。

春。心的外傷後ストレス障害(PTSD)などを学ぶ授業で津波の画像が流れた。ずっと避けてきた光景を目の当たりにして教室を抜け出した。「やっぱり怖い」。涙声で父の隆道さん(49)に電話した。「看護師になるなら、いつか乗り越えなきゃいけないだよ」と父に励まされた。

夏。帰省すると、母の遺体が見つかった市民会館に、立ち入り禁止なのに忍び込んだ。震災後、一度も夢に出てこないのが寂しくて、「幽霊でもいいから会いたかった」から。

あの日の午後3時21分、高台の高校にいた瑠璃さんの携帯に母からメールが届いた。「落ち着いて。あなたはそこにいなさい」。それが最後の言葉になった。市の嘱託職員だった母は避難者の世話をしていたという。

靴やガラスの破片が散乱したままの市民会館の窓から、海が一望できた。「お母さん、どんな気持ちで窓の外を見たんだろう」。大声で泣いた。

いまも時折、心の栓が抜けてしまうような感覚に襲われる。母が好きだった缶コーヒーをコンビニエンスストアで見つけた時。小さな地震にも肩をこわばらせる自分に気づいた時。涙が止まらなくなる。

父に電話をかけると「思いっきり泣けばいいよ」と言ってくれる。大学には「瑠璃のつらさはわからないけど」と一緒に涙してくれる友だちもできた。「支えてくれる人がいる私は、まだ幸せ者。ひとしきり泣くと、少しだけ気持ちが楽になる。そうやって、少しずつ前に進んでいくしかないんだって思うんです」

アパートの部屋には家族写真を飾っている。4年前、東京ディズニーリゾートで撮った一枚。津波にのまれた自宅の2階で、なぜか泥もかぶらず見つかった。

父と母と弟の証道(しょうどう)君(17)と。家族4人で遠出をしたのは、この時が最後だった。写真の母は、瑠璃さんとおそろいの水玉模様のストールを巻いてほほ笑んでいる。「やると決めたら最後まで頑張る」という母の口癖を思い出す。

トランペットはクローゼットの奥にしまっている。近所迷惑だから部屋で吹くことはないけれど、月に一度の手入れは欠かさない。

母とはまだ、夢でも会えない。布で丁寧な磨きながら、願いを込める。看護師になったら、このトランペットで患者さんを和ませたい。「その時、きっと、お母さんは『一人前になれたのね』と夢に出てきてくれるはず」

2013年3月12日



自宅跡でトランペットを吹いて涙ぐんだ。この写真が朝日新聞に掲載され、都内の復興支援コンサートに招かれた=2011年4月11日、岩手県陸前高田市



復興支援コンサートでトランペットを演奏する佐々木瑠璃さん=2011年5月20日、東京都新宿区の東京オペラシティ

## 『少しだけ強くなりました』 追悼式、岩手代表の18歳

東日本大震災の追悼式で山根りんさん(18)が読み上げた「岩手県遺族代表のこぼし」は以下のとおり。

私は日々便利になっている世の中を当たり前だと思っていました。毎日学校に通い、家族と一緒にご飯を食べること、母がいつも傍(そば)に居てくれることも当たり前だと。あの日が訪れる前までは。

忘れもしない2年前の3月11日。

突然、今までに感じたことのない地鳴りとともに強い揺れが襲ってきました。

高校からの帰り道、私を心配し母が迎えに来てくれました。周りを見渡すと真っ黒い津波が遠くに見えたと思っていたのに、母と一緒に高台へと避難しようとしていた足元に濁流が近づいて来る。「大丈夫だよ」、そう励ましながら母の背を押すように急いでいた矢先、突然、視界が真っ暗になり、気が付くと海の中にいました。

必死にもがき、薄れる意識の中、木材につかまり黒い海の上に出て、周りが静まり返った中、母を何度も何度も呼び続けました。私は近くの建物まで泳ぎ、今こうしてこの壇上に立っています。

一緒に笑い、当たり前のように暮らしていた母が亡くなるなんて。数日後、遺体安置所で見つかった母の顔を見た時、「これが現実なんだ」と気づき、あの時ほど母の大切さを感じたことはありません。

あれから2年。私はあの日より、少しだけ強くなりました。それは、亡くなった母への想(おも)いと残された家族や友人、そして多くの方々の支えがあったからです。

私はもちろん、被災者は、全国・世界の皆様から、多くの支援物資、義援金による支援や、自衛隊、ボランティアによる温かい支援、励ましの言葉を受け、生きる希望が生まれました。

人と人との絆や助け合い、人の温かさを強く感じ、とても勇気づけられました。だからこそ今、私も前を向いて生きること、自分が決めた道を歩むことも少しずつだけ、できているような気がします。

私の生まれ育った宮古の今は、壊れた道路が直り、新しい店舗や家が建ち始め、通学途中にあったがれきの山も減り、着実に復興が進んでいると感じられます。

なにより周りのみんなに笑顔が増えたと思います。

母に感謝の言葉をかけることも、親孝行もできませんでしたが、私が自分らしく生きることが、母に対する一番の恩返しだと思っています。

多くの命が犠牲になった中、助かったからには、生きて人の役に立つことが自分の使命だと考え、世界の自然災害が発生した国々において、自らの被災体験を活(い)かした支援活動ができる人材となり、東日本大震災がづらい記憶ではなく、未来につながる記憶となるよう、被災地から私達(わたしたち)若い世代が行動していきます。

最後に、天皇皇后両陛下をはじめ、世界各国や日本中の多くの皆さまからの励ましやお見舞いありがとうございました。

今日こうしていることに感謝し、恩返しすること、忘れないこと、これからも自分らしく生きることを誓って、遺族代表のこぼしとさせていただきます。

2013年3月11日

二つの記事からは前向きに生きようとする決意と覚悟が感じられます。いじめや体罰が原因と思われる自殺が問題となり、マスコミはいじめをなくすること、体罰なくすることばかりを叫んでいます。もちろんいじめや体罰が良いことではないことは誰もがわかります。どこまでが『体罰』で、どこまでが『いじめ』なのか。そんな答えの出ないことに対して、いまさらのようにいいかげんに正義を振りかざす有識者や評論家、そしてメディア。いつの時代も彼らはそうです。

本当に大切なことは『生きる』ということです。神戸や東北の震災で多くの人々が生きていたのに亡くなりました。憎む相手のいない自然災害、家族や友達を失っても力強く前向きに生きようとしています。

人生を生きていくには、大変なことや辛いことや悲しいことをたくさん経験するはず。それでも人生は『前向きに』でなくてはなりません。しかし生きるために、時には『逃げる勇気』も大切なことを教えることが必要なのは！



東日本大震災2周年追悼式で、岩手県の遺族を代表して言葉を述べる山根りんさん=11日午後3時17分、東京都千代田区の国立劇場